チャペル週報

貧しい人々は、幸いである、
神の国はあなたがたのものである。
今飢えている人々は、幸いである、
あなたがたは満たされる。
今泣いている人々は、幸いである、
あなたがたは笑うようになる。
（ルカによる福音書６：20ｂ－21 ）

ランバス記念礼拝堂

秋季宗教運動特集号
2008.10.13～10.17 No.16
関西学院宗教センター

☆チャペル・スケジュール☆

時間 10：35～11：05　　場所 各学部チャペル

10月13日(月)	神	山口眞理（大阪夕陽丘学園短期大学准教授）
	経	舟木　譲（宗教主事）
	人	辻　学（広島大学大学院教授）
10月14日(火)	神	坂本敦司（M2）
	文	田淵　結　（宗教主事）
	社	いのちを考える④　岩野祐介（神学部助教）
	法	音楽チャペル　上ケ原フィルハーモニック
	経	上ケ原ハビタット
	商	秋の音楽チャペル　聖歌隊
	総	金　永秀（沖縄キリスト教学院大学准教授・宗教部長）
10月15日(水)	神	上内鏡子（神戸イエス団教会牧師）
	社	いのちを考える⑤　Ruth M.Grubel（院長・宣教師）
	法	English Chapel "Thy Kingdom come"
	経	舟木　譲（宗教主事）
	商	山本俊正（宗教主事）
	人	広瀬康夫（吉岡記念館職員）
	理	「宗教運動のために」理工学部ハンドベル
	総	李　政元（総合政策学部准教授）
10月16日(木)	大学合同チャペル（西宮上ケ原）10:20-11:20	
	「みんなが満腹するために」青木理恵子（CHARM事務局長）	
	於：中央講堂	
	大学合同チャペル（神戸三田）10:20-11:20	
	「Habitat for Humanityって何？」今泉信宏（総合政策学部宗教主事）	
	於：Ⅱ号館201教室	
10月17日(金)	大学合同チャペル（西宮上ケ原）10:20-11:20	
	「貧困とはなにか？」太田　歩（ハビタットジャパンスタッフ）	
	於：中央講堂	
	大学合同チャペル（神戸三田）10:20-11:20	
	「みんなが満腹するために」青木理恵子（CHARM事務局長）	
	於：理工学部チャペル	

◇ランバス早天祈祷会　毎金曜日　午前8：20～8：40　於：ランバス記念礼拝堂（上ケ原）

10月16日（木）宗教運動のために　Andreas Rusterholz

10月17日（金）神学部のために　神田健次

◇総合政策学部早天祈祷会　毎木曜日　午前8：40～　於：宗教主事室

秋季宗教運動・大学キリスト教週間への招き
－横断歩道の前で－

永　田　　雄 次 郎

ＪＲ宝塚駅の改修工事に伴い、阪急に乗り換えるのに新しい道（コース）ができあがったようだ。これは、駅関係者が意図的につくったのではなく、乗降客が発見した道である。その平坦さゆえに多くの人々が往来している。私も利用者の一人となった。

人は一団となって、二箇所ある横断歩道を通過する。当然、車が数台、そのために停車することになる。しばらくすると、人の数は少なくなるが、一人、また一人とそこを歩む。車が二、三台待たされる。ＪＲ、車にとっては歓迎されない道なのか、従来のコースを歩むようにとの案内板が駅前に立つ。私も罪深い者なのかとの思いもする。もちろん、歩行者にとって、「法律上、何の問題もない」と居直るつもりは毛頭ない。

ある日、私は件の横断歩道の前に、ポツンと一人残された歩行者となった。乗用車が進み出たので立ち止まる。すると、運転される人が私に会釈をされ、車をゆっくりと進ませた。声は聞こえないが、「どうも、ありがとう」との気持ちが伝わってくる。ニコニコする私。迷惑な歩行者のようなうしろめたさも少し軽減された。

その後、同じことがあった時、運転手の方が、「お先にどうぞ」と車内で手を示されたり、微笑まれたり、その場に暖かい空気が漂う体験をする機会が増した。中には、猛スピードで通り抜ける車もあるが。

私たちは道を歩く折、事故に気をつける意識を働かせながら、ひたすら前を向いて歩む。しかし、自分と他者の関わりを頭に思い浮べ、今少しばかり落ち着いて横断歩道を前にすると、歩行者、運転者の豊かな息づきを楽しむこともできる。それは、秋季宗教運動・大学キリスト教週間の諸行事と私自身の関係に似ていると思われてならない。単に走り去る眼の前の車のごとくに行事をとらえないで、一度、歩みを休めて、それらと会話する時間の余裕を持ってみてはいかがであろうか。そこに、新しく、優しいコミュニケーションが成り立つと確信したい。

まさに、「ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎しんでいましょう」（テサロニケの信徒への手紙一、５－６）の聖句のような、真に目を覚ました自分が発見されることであろう。

（文学部教授）

いまの日本で「わかちあう」ために

青　木　理恵子

日本は、自分達の社会をこれまで「一億総中流社会」と表現してきましたがこのところその様相が変わって来ています。大阪であればどこの公園でもその一角を生活の場にしているホームレスと出会うことは当たり前となり、これは大きな都市だけではなく地方でも見られる光景となっています。また、青年が不安定な派遣労働などの低賃金労働を強いられるワーキングプアーやインターネットカフェで寝泊まりをする新たなホームレスの形態が出現しています。

戦後の日本は、段々と経済力を高め、東京オリンピック、大阪万国博覧会、などを契機に次々と道路や鉄道などの大規模建設を進めてきました。建設労働に組み込まれて行った最初の労働者は地方の青年でした。「金の卵」ともてはやされて中学校を卒業したばかりの若者が家族を支えるために集団で大都市にやってきました。この時代に家族の生活を支えたこの人たちは、その後郷里に帰った人もあれば郷里には帰らずそのまま大都市でひっそりと暮している人もおられます。

その後日本は1980年にバブル経済の絶頂期を迎えましたが、その時期からの底辺労働を支えて来たのが外国人移住者です。最初は、日本に近い台湾、韓国、からそして次に東南アジアの国々からそしてブラジルなどの南アメリカ諸国からの日系人の受け入れ、技能研修生の受け入れ、そして今年には看護士、介護士の受け入れとこの30年間外国人移住者は出身国や職業の種類などが変わりながらも日本社会に組み込まれてきました。

私は、これまで２０年間外国籍移住者の支援に市民団体の立場で携わってきました。最初は、横浜のカラバオの会で、次に京都のYWCAアプトで、そして

今は大阪の移住者の健康と権利の実現を支える会（CHARM）で移住者の権利を擁護する活動をしています。外国籍移住者は、劣悪な労働条件の元で働かされながらも職場を変更する権利もなく多くの人たちがタコツボのような状況の中ガマンしながら郷里の家族を支えています。この間法律の整備が進んだはずですが、外国籍移住者の労働状況は少し前の「金の卵」の時代とそう違いません。外国人移住者の労働問題が表沙汰になることがほとんどないのは、日本の一般社会がこの状況について知らないことが大きな理由です。日本は、社会全体がタコツボのように分断されています。学歴により、職業により、障害のあるなしにより、皆が別々のタコツボに入っていて、それぞれの中で一生懸命仕事をしているのでとても他のタコツボを覗く余裕がないという状況ではないでしょうか。自分がまじめに自分に与えられている仕事をしている間にも人権を踏みにじられている人が同じ空の下にいる、さらに自分の快適な生活がその人たちの苦しみの上に成り立っていることを知る術もないのが現状ではないでしょうか。

自分が享受している豊かさや幸せをその人たちと「わかちあう」ためには、まず自分がタコツボを出て、その人たちと人格として出会うことから始まります。出会ってその人の経験を聞き、想いを感じ、その人が置かれている状況について理解することで、魂が奮い立たされ、行動に押し出さされることで「わかちあい」につながります。同じ関学のキャンパスで勉強している留学生の１人と出会うことがその一歩かもしれません。夏に出かけた海外でのワークキャンプがそのきっかけなったかもしれません。たいそうなことでも危険なことでもなく、自分の狭い固定概念と偏見を越える覚悟をして相手に学ぼうとする姿勢から出会いと「わかちあい」は始まります。

（NPO法人CHARM事務局長、ソーシャルワーカー）

「貧困」とは何か？

太　田　　歩

「貧困」という言葉を聞いて、あなたは何を想像しますか？大学生時代の私なら迷わず発展途上国で暮らす人々を思い浮かべたでしょう。

大学生時代に出会った国際NGOハビタット・フォー・ヒューマニティを通じ、発展途上国での住居建築活動に参加したことが、「貧困」について考える最初のきっかけとなった。貧困ゆえに日々の暮らしがままならず、1日中働かされる子どもたちや、廃棄物で建てた家に住む人、学校に行けずに育ったために読み書きができない人など、多くの人々と出会った。そこで目の当たりにした貧困から受けた大きな衝撃が、青年海外協力隊員、国際NGO職員と、国際協力に携わる道へと私を導いてきた。

青年海外協力隊員として活動をしたのは、中米の最貧国と言われるニカラグア共和国。最貧国という言葉通り、ほとんどの国民が貧しい暮らしをしている国である。ほんの一部の裕福な人たちが富を独占し、その他の多くの人が無職であり、仕事があったとしても超低賃金。もちろん私が一緒に仕事をしていた同僚も決して裕福ではなく、一緒に遊んでいた友達の多くも貧しかった。

物質的に恵まれた先進国から見ると、彼らの生活はとても質素で、容易に各国の援助対象ともなるだろう。しかし、先進国に暮らす人々の価値観で彼らの生活を「貧困」と決めつけていいのだろうか。事実彼らは非常に貧しいが、「経済的な」貧困は彼らのもつ一面にすぎない。互いに温かい手を差し伸べあいながら、人生を充分に楽しんで生きる彼らを、「貧困」という一言で片づけてしまうのはあまりにも一方的ではないだろうか。もちろん私が実際に行った援助活動の中でも、先進国で培われた技術や経験が大きな役割を果たした。しかし、私が彼らに伝えることが出来た技術や経験以上に、彼らから多くの事を教えてもらった。限られた環境で生き抜くすべ、与えられた状況を受け止める力、互いに支えあうことの大切さ、家族を愛すること、日々の糧に感謝することなど、挙げだせばきりがないほどの学びを彼らに与えてもらった。これらは、日本での生活では学ぶことが出来なかった点であり、このように少し視点を変えてみれば、先進国に暮らす人々がもつ貧しい面も見えてくるのではないだろうか。生きる力においては、私たちは確実に発展途上国にみえてしまう。

支援する立場になる機会の多い私たちが決して忘れてはならないことは、人間はみな「わかちあう」存在であるということ。片側の人が一方的に「分け与える」のではなく、人は常に互いにわかちあいながら生きている。分かち合うものが目に見えないと、互いに分かち合っているという事実を忘れがちである。しかしその事実に目を向けることによって、いかに私たちが独善的な考えを持ちやすいかを再認識することもできるだろう。

（ハビタットジャパンスタッフ）

“ Sharing ”

今　泉　信　宏

‘ Sharing ’という英語の言葉がある。「分け前」とか「分かち合い」と訳される。２－３人が談笑しているところに、誰かが入ってきて“ Share! ”と言う。これは「私も仲間に入れてくれ」という意味。しかし、実は“ Sharing ”の真の意味は「分かち合いにはある程度の痛みが伴う」ことを言う。「痛み」は通常肉体的な痛みを指すが、それより「精神的な痛み」のほうが多いのではないだろうか。アメリカンパイが一つあるとする。10に切ると10人がパイにありつける。しかしこの10を50人、いや100人が食べようとするとどうなるか。自分の一切れ（分け前）の何十分の一か何百分の一しか食べられなくなる。ほとんどがパイを「味わう」ことすら出来なくなる。しかしこれが「痛み」であるのだ。つまり「自分が大切にしている一部分」を他のために犠牲にする。「犠牲」と言えば否定的に聞こえるが、一人一人が皆自分の大切な「share」の一部を他と分かち合って生きていこうとするならば、社会も世界も変わる可能性が出てくるのではないだろうか。問題は人間が自分のshareのみならず他のshareまで自分のものにしようとするところにある。

私は毎年二回25～30人の学生をフィリッピンへワークキャンプのため引率していく。

５日間の猛暑の中での過酷な労働で家建築に従事する。「家」といっても、側溝を掘り、砂利とコンクリートを流し、その上に簡素なブロックを43段積み上げ、コンクリートで固め、最後にトタンの屋根を乗せる真に先進国では考えられないような簡素な「家」である。５日間私も学生と新しいホームオウナーと共に汗を流し労働の大切さを体験する。そして出来上がった「家」に入るためにDedication Ceremony（神がこの家を与えてくださったことに感謝をする）を行う。学生たちは新しいホームオウナーに家の鍵と聖書を手渡し、家が温かい家庭になることを祈る。声が震えて言葉にならないときが多い。それでも学生たちは力いっぱい感謝と希望をホームオウナーに託すのである。非常に感動的なシーンでもある。私は今回で21回目、学生の中にも５・６回目の者もいる。何度行っても感激を忘れることはない。５日間の過酷な労働をshareする間、肉体的また精神的な「痛み」があるが、それがあるからこそ、新たなホームオウナーが生まれ、そこに温かい家庭が築かれていく。

フィリッピンは国中が貧しい。しかし学生たちはホームステイで家庭の温かさを体験する。互いが互いのことを思いやる。貧しい地域では共存、共生の地が出来上がっているのである。つまりsharingしていかないと生活ができないのだ。学生たちはこのことを目の当たりにして帰ってくる。そして「まことの豊かさ」とはいったい何なのかを改めて問い直すのである。私はこういった学生たちが、豊かな社会で生きていこうとする中で、他との「まことの分かち合い」を体験したがゆえに、社会で、世界で活躍し、もっともっと一人でも多く「痛みを伴うsharing」を実践していけるように願いつつ学生と日々を過ごしている。

（総合政策学部宗教主事）

●大学キリスト教週間プログラム

上ケ原ハビタット　パネル展

期　間：10月14日（火）～17日（金）

10：30～17：00（金曜は16：00まで）

会　場：吉岡記念館ラウンジ

●第１７８回ランバス演奏会

犬賀貴夫（テノール）＆峯口弥生（ソプラノ）の夕べ

「畑道也先生に捧ぐ」

日　時：10月16日（木）17時開演

会　場：ランバス記念礼拝堂（上ケ原）

主　催：宗教センター

出演者プロフィール

犬賀　貴夫・いぬが　たかお（テノール）

大阪音楽大学音楽学部声楽科卒業。同大学院オペラ研究室修了。1998－99年度国際ロータリー財団国際親善大使としてスペインに留学、ペドロ･ラヴィルヘン氏に師事。神戸市混声合唱団に６年間在籍、合唱を中心にオペラソロも演奏。関西学院高等部音楽科教諭。山村弘氏に師事。

峯口　弥生・みねぐち　やよい（ソプラノ）

大阪音楽大学音楽学部声楽科卒業。同大学院歌曲研究室修了。日本シューベルト協会推薦ドイツ歌曲演奏会、日本歌曲の夕べ等に出演。渡辺弓子、上木惇の各氏に師事。関西歌曲研究会会員。

長谷川千彰・はせがわ　ちあき（ピアノ）

神戸女学院大学音楽学部音楽学科ピアノ専攻卒業。中村美生子、奥村智美の各氏に師事。兵庫県立加古川東高等学校非常勤講師。姫路市立広嶺中学校コーラス部伴奏ピアニスト。加古川音楽家協会会員。

●ＣＤ・ＤＶＤライブラリー

吉岡記念館事務室宗教センターには、教会音楽、キリスト教に関するＣＤやＤＶＤを備えています。本学学生及び教職員（学生証または身分証明書必要）であればどなたでも利用できますので、希望者は事務室までお越しください。

●使用済み切手収集にご協力ください

本学では日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)切手部の活動に協力し、使用済み切手の収集をしています。通常切手も対象としていますのでどうぞ吉岡記念館常設の回収箱にお届けください。

●大阪梅田キャンパスチャペルアワー

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、下記のとおりチャペルアワーを開催しています。どうぞご参加ください。

10/17（金）田淵　結（大学宗教主事）

10/24（金）田淵　結（大学宗教主事）

10/31（金）アンドレアス・ルスターホルツ（宣教師）

いずれも18：00～18：20　　1405教室にて